

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381227

研究課題名(和文)戦後の「生活のうた」の伝播と変容 歌詞, 旋律, リズムに関する歴史的・心理学的研究

研究課題名(英文) Diffusion and Deformation of "Songs for Daily Life Guidance" after the War: A Historical and Psychological Study on Lyrics, Melodies and Rhythms

研究代表者

嶋田 由美 (SHIMADA, YUMI)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：60249406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、歌唱において等拍の楽曲が「びよんこ」リズムになりがちな傾向に着目し、戦後の保育現場で集団指導やしつけを目的として用いられてきた《おやつ》《おべんとう》の曲を中心に、その傾向の実態を明らかにし、かつ要因の一端を探るものである。

研究の過程では、戦後の「生活のうた」の歴史的経緯を明らかにしつつ、リズム変容の点で特徴的な上記の2曲について全国300園弱の保育現場への質問紙調査と幼児の歌唱実態の観察を中心に分析し、楽譜上は等拍で記載されながらも「びよんこ」リズムになりがちな傾向の様相と、ピアノ指導がある程度リズム変容に作用していることを明確にした。

研究成果の概要(英文)：This study focuses attention on the tendency that some songs of equal rhythm tend to be deformed to those of dotted rhythm in singing, and clarifies the actual condition of the trend and explores a part of factors, centering on "snack" and "lunch box" songs that have been used for group-class lessons and upbringing at nursery schools after the war.

In the course of the study, while the historical background of "songs for daily life guidance" after the war was being clarified, the above-mentioned two songs having characteristic of the rhythm deformation were analyzed mainly through questionnaire surveys to less than 300 nursery schools nationwide and actual observation of infant singing. And the study has clarified the aspect of the tendency that equal rhythms on the score are deformed to dotted rhythms and the fact that piano teaching acts on the rhythm deformation to some extent.

研究分野：音楽教育

キーワード：「生活のうた」 リズム変容 「びよんこ」リズム 等拍 《おべんとう》 《おやつ》

## 1. 研究開始当初の背景

歌唱の際に、8分音符2つで記譜されたリズム、いわゆる「等拍」のリズムがややもすると付点8分音符と16分音符で記譜されるような曖昧な比率による長短2つの音の反復のリズムになりがち傾向はこれまでも指摘されてきた。筆者らはこの曖昧な比率の長短2音の反復リズムを「ぴょんこ」リズムと名づけ、日本語の歌詞を持つ歌の歌唱時に見られるリズム変容として着目して研究を推進してきた(課題番号:23531194 参照)。実際に『尋常小学唱歌』所載の《桃太郎》や《鳩》などの等拍のリズムの唱歌が、学校現場で「ぴょんこ」リズムになる傾向が認められ注意を促す指導言が各種の教授細目上にも見られるし、SPレコードにも「ぴょんこ」リズムで歌唱される《桃太郎》や《鳩》の音源が残されている。

しかしながらこの「ぴょんこ」リズムになりがち傾向は、明治期の唱歌の歌唱時に限られた問題ではなく、戦後、保育現場で集団指導やしつけのために使われてきた「生活のうた」の中にも見られる現象である。それはたとえば《おべんとう》や《おやつ》の楽曲に見られる事例である。これらの楽曲はオリジナルの楽譜が明らかにされていながらも、リズムだけではなく歌詞や旋律の各面でも様々に変容されながら歌い継がれている。このような事象の背景には研究グループがこれまで指摘してきた日本語歌詞に起因する「ぴょんこ」リズムへの変容の問題や保育現場でのピアノ伴奏の扱いがあると推察される。

本研究はこうした保育の場における「生活のうた」の伝播と変容の実態を歴史的、かつ心理学的アプローチにより明らかにするものである。

## 2. 研究の目的

戦後、保育現場向けに挨拶や活動の区切りのための集団で歌う歌がいわゆる「生活のうた」として数多く作られたが、それらの中には《おべんとう》や《おやつ》をはじめとしてオリジナルの楽譜が明らかにされていながらも歌詞、旋律やリズムの各面で様々に変容されている事例が多い。このような事象の背景にはこれまで本研究グループが明らかにしてきた日本語歌詞に起因する「ぴょんこ」リズムへの変容の問題がある。しかし一方で保育現場の集団での「生活のうた」の諸要素の変容には、歌唱時のピアノ伴奏の問題や子ども自身の音楽認知の問題があると考えられる。こうした保育の場における歌の伝播と変容を、戦後の生活指導やしつけ時の歌の使われ方の経緯を明らかにしつつ、子どもと保育者側との相互作用の視点で総合的に研究して得られた成果は、保育者養成や保育現場での実践に大きな意義をもたらすものである。本研究はこのような課題意識に基づき、我々のこれまでの研究成果を基盤に、子

どもによる歌の伝播と変容の問題を歴史的、心理学的に総合的な見地から解明しようとするものである。

## 3. 研究の方法

本研究は戦後の「生活のうた」における等拍から「ぴょんこ」リズムへの変容を中心に子ども自身による歌の伝播の過程を明らかにし、日本人のリズム感覚の形成に関する包括的な理論構築を目的とするものである。したがってここでは歴史的調査研究と心理学的な実験研究の2分野の研究成果を有機的に関連付けながら推進する必要がある。歴史的調査研究班(嶋田・村尾が担当)では戦後の「生活のうた」にみる等拍から「ぴょんこ」リズムへの変容に関する文献データの収集、質問紙調査による保育現場におけるリズム変容の実態調査、インタビューや子どもの歌唱実態の記録によるリズム変容のデータ収集と分析という手順で研究を推進する。実験的実証研究班(小川・水戸が担当)では、質問紙調査で得られた回答の分析と、子どもの歌の変容の要因を実際の保育現場において実験的な手法で調査する。

## 4. 研究成果

(1)初年度(平成26年度)は研究の基礎資料やデータの収集、分析の期間と位置づけて研究を推進した。歴史的調査の分野では、1950~1960年代の保育系雑誌記事の調査を通して1950年代半ば以降、保育現場で生活指導やしつけのために歌が装置的な意味合いで使用されるようになっていく過程を明らかにすることを試みた。そしてその中で集団において統一されたリズムで調子よく歌を合わせることの必要性が、生活指導的な歌のリズムを自然に「ぴょんこ」リズムへと変容させる要因の一つとなった可能性を見いだすことができた。

また現在の保育現場における生活指導的な歌の扱いの実態を把握することを目的として、全国の保育所/園を対象とした質問紙調査を実施した。本調査では、《おべんとう》《おやつ》の2曲がどのようなリズムで歌唱されているのかに焦点をあてたが、回答については図1のように想定される各種のリズム譜を明記し、その中から該当するリズムを回答してもらう方法をとった。

同時に、保育の中でのピアノ伴奏がこれらの曲のリズム変容に何らかの作用をしているのではないかという仮説に基づき、園での歌唱の際のピアノ伴奏についても質問項目を設けた。さらに、これらの楽曲がどの種類の楽譜に基づいているのかを把握するために出典に関する質問項目も設け、この種の曲に関して園独自の楽譜や他の楽曲を採用している場合などには楽譜の提供も依頼した。一方、子どもたちが集団生活の中で歌を変容させていっているのではないかという仮説をたてて《じゃんけんホイホイ》という遊び

歌の旋律や歌詞についての項目も同調査に加えた。結果として339園から回答を得ることができた。また自由記述や今後の追加調査への協力に関する承諾件数も多く、次年度の分析とさらなる調査へ多くの資料を得ることができた。

①   
おべんとう おべんとう

②   
おべんとう おべんとう

③   
おべんとう おべんとう

④   
おべんとう おべんとう

⑤ 上記①～④の混合

⑥ 分からない

図1 《おべんとう》のリズムの選択肢

(2) 次年度(平成27年度)の研究では、実際の保育現場で、子どもの歌がリズムの面でどのように変容して歌われる傾向にあるのかに着目し、子どもの歌唱の実態の観察を中心として研究を推進した。具体的には「びよんこ」リズム、「びよんこ」止め、等拍などのリズムの混じった音源を聴きながら旋律を記憶した場合、子どもの歌唱の中でリズムがどのように変容するかを調査した。調査の方法は、上記それぞれのリズムで歌唱した「おべんとう」の歌を例えば、1回目は「びよんこ」リズム、2回目は「びよんこ」止めの歌唱というように、繰り返して組み合わせた実験刺激の音源を用意し、代表者と分担者が協力を要請した富山県と長崎県内の複数の保育園に出向き、まず園児全員に一定回数聞かせた。その後、クラスの担任が、毎日、研究者が指示をした回数ずつ音源を流し、2週間後に研究者が保育園を再訪し、園児一人一人の歌唱を録音して分析を行った。その結果、等拍、「びよんこ」リズム、「びよんこ」止めのリズムの混じった実験刺激でも、「びよんこ」リズムにひきずられる傾向にあることが明らかにされた。この結果については第46回日本音楽教育学会において「戦後の『生活のうた』の伝播と変容(1)-保育現場におけるリズムの変化に関する実験的検証-」と題して共同で口頭発表を行った。

一方、前年度に行った戦後の「生活のうた」に関する雑誌等に記載された文献資料を整理、分析し、研究代表者である嶋田が「生活指導・『しつけ』のための子どもの歌 - 1950～1960年代の保育雑誌記事によるその成立過程の考察 -」としてまとめ、『学習院大学文学部研究年報』(第61輯 2014)で発表し

た。本稿では、1950年前後から保育現場において生活指導やしつけという観点からの論考が増え、その中で本研究で扱っている《おべんとう》の楽曲が1949年の『うたとゆうぎ(こどものこよみ)』での初出時には等拍のリズムと「びよんこ」リズムの混合で記譜されていたにもかかわらず、数年後に保育系雑誌に転載されるにあたって既に全体が「びよんこ」リズムで記載された楽譜に修正されていた事実、あるいは保育現場ではピアノが生活指導の装置的な役割を果たしていく過程などを明らかにした。

(3) 最終年度(平成28年度)には、保育所/園を対象に初年度に行った質問紙調査の回答の詳細な分析を行った。回答を得られた園の総数339園のうち、分析の対象とされたのは295園からの回答であった。その結果、《おべんとう》《おやつ》の2曲ともに初出の曲譜のリズムから変容された「びよんこ」リズムで歌われる傾向にあるという結果が確認された。この結果については共同執筆の形で「子どもによる歌唱リズムの変容-保育園における《おべんとう》と《おやつ》の実態調査を通して-」として『学習院大学教育学・教育実践論叢』(第3号 2017)にまとめた。質問紙調査結果の分析からは常時、これらの歌を歌っている保育所/園の子どもは多くはピアノ伴奏を耳にする場面も多いことが確認され、保育者によるピアノを用いた歌唱指導が子どもの歌唱時のリズム変容にもたらす作用に関する実験手法の確立と実施が今後の課題として提起された。

質問紙調査ではもう1曲、《じゃんけんホイホイ》のメロディーの後半部分、すなわち「どっちだすの」の箇所「だすの」の旋律が上行するのか、あるいは一定であるかを問うているが、回答から保育者が自身で判断しかねている様態が認められたので、本年度には研究者が聴き取り調査を行うこととした。具体的には、東京都、広島、宮崎、青森県内の大学生約100名に対し、一人ずつこの歌を動作をつけて歌ってもらいビデオとICレコーダに記録し、「だすの」の箇所が上行するのか、あるいは一定であるかを複数の研究者が判断するという手法をとった。この結果については歌唱時の居住地や手遊び動作の様子、あるいは「だすの」以外の多様な言葉(たとえば「ひくの」「かくす」など)の使用とも関連させながら今後、結果をまとめ報告する予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

嶋田 由美、小川 容子、村尾 忠廣、水戸 博道、子どもによる歌唱リズムの変容-保育園における《おべんとう》と《おやつ》の実態調査を通して-、学習院大学教育学・教育実践論叢、査読無、第3号、

2017、83-94

嶋田 由美、生活指導・「しつけ」のため  
の子ども歌-1950～1960年代の保育雑  
誌記事によるその成立過程の考察-、学習  
院大学文学部研究年報、査読無、第61輯、  
2014、151～171

〔学会発表〕(計1件)

水戸 博道、嶋田 由美、小川 容子、  
村尾 忠廣、戦後の「生活のうた」の伝  
播と変容(1)-保育現場におけるリズム  
の変化に関する実験的検証-、日本音楽教  
育学会第46回宮崎大会、2015年10月4  
日、シーガイアコンベンションセンター  
(宮崎市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

嶋田 由美 (SHIMADA, Yumi)  
学習院大学・文学部・教授  
研究者番号：60249406

### (2) 研究分担者

小川 容子 (OGAWA, Yoko)  
岡山大学・教育学研究科・教授  
研究者番号：20283963

村尾 忠廣 (MURAO, Tadahiro)  
帝塚山大学・現代生活学部・非常勤講師  
研究者番号：40024046

水戸 博道 (MITO, Hiromichi)  
明治学院大学・心理学部・教授  
研究者番号：60219681